

現場事務所の窓に掲げた横断幕

私が建設会社の経営に携わるなかで、「職業奉仕とは何か」を改めて考えるきっかけとなった出来事があります。私たちが市内の小学校の校舎改修工事を担当した時のことです。工事期間中、私はよく二階に設けた現場事務所に立ち寄り、進捗や安全管理の状況を確認していました。ある日の午前、窓の外を見ると、校庭で子どもたちが持久走大会に取り組んでいました。

寒さの残る季節でしたが、子どもたちは一生懸命、顔を真っ赤にしながらかけています。順位を競うより、最後まで走り切ることに意味がある、そんな先生方の思いが伝わってくる光景でした。しかしよく見ていると、苦しきのあまり泣きながら走っている子もいます。見ているこちらまで胸が熱くなるほど懸命に前へ進む姿に、現場監督と若手社員は何か彼らの力になれないかと考え始めました。

工事というものは、通常学校側にご迷惑をお掛けしないよう細心の注意を払う立場にあります。ですから、現場の存在をできるだけ「消す」ことが求められるのですが、その日はどうしても気持ちが動きました。「せめて背中を押すような応援ができないだろうか」。そこで彼らはパソコンを開き、急いで横断幕を作りました。「最後までがんばって走ってください」。たった一言ですが、心を込めたメッセージでした。

プリントした横断幕を二階の窓に掲げると、ちょうど子どもたちの走るコースから見える位置でした。最初は気づく子がまばらでしたが、一度目に入ると次々に指をさして知らせ合い、苦しい表情が少し笑顔に変わっていくのが分かりました。泣きながら走っていた子も、顔を上げて横断幕を見つめ、最後までしっかりゴールしていきました。

その姿を見た時、「建設会社としてできる奉仕」とは必ずしも大きな事業や制度的なものだけではないのだと深く感じました。

大会が終わった後、先生方がわざわざ現場事務所まで来られ、「工事中にもかかわらず、子どもたちに寄り添っていただきありがとうございます」と声を掛けてくださいました。また、後日には子どもたちから手書きのメッセージも届きました。「応援の旗を見てがんばれた」、「うれしかった」と書かれた言葉の数々に、私たちの仕事が社会の一部として生きていることを改めて実感しました。

建設業は、地域の安心と暮らしを支えるインフラをつくる仕事です。その役割は大きく、時に専門性ばかりに意識が向きがちです。しかし、私たちがつくっているのは単なる「建物」ではなく、その先にある子どもたちの学びや笑顔、地域の人々の生活、未来そのものです。現場という日常の中で、誰かの力になる小さな行動を積み重ねることこそ、私が考える職業奉仕の根幹であります。

この経験は、社員にもよく話しています。建設のプロとしての技術や品質はもちろん大切ですが、それ以上に「地域社会の一員としてどう振る舞うか」が、私たちの信頼を形づくっていくのだと。あの日、横断幕を掲げた小さな一幕は、今も私の経営姿勢の原点となっています。